

うら紫の藤の花——『平家物語』『大原御幸』の一節

妹 尾 好 信

『平家物語』灌頂の巻「大原御幸」の段は、名文の誉れ高く、教科書にも採られて著名であるが、その一節に次のような件がある。後白河法皇が寂光院に到着した時の庭のたすまいの描写である。

中島の松にかゝれる藤なみの、うら紫にさける色、青葉まじりの遅桜、初花よりもめづらしく、岸のやまぶき咲みだれ、八重たつ雲のたえまより、山郭公の一声も、君の御幸をまちがほなり。
(新日本古典文学大系本による)

この辺り、終始歌語による裝飾的な文章になっており、特に「青葉まじりの遅桜、初花よりもめづらしく」の部分は、諸注が指摘するごとく、『金葉集』巻二・夏・九五に載る藤原盛房の歌、「夏山のあを葉まじりのおそ桜はつはなよりもめづらしきかな」を踏まえた表現である。具体的な和歌を引用したのはこの部分だけとされているようだが、「中島の松にかゝれる藤なみの、うら紫にさける色」の部分も、特定の和歌を踏まえた表現なのではなからうか。

『詞花集』巻八・恋下・二五七に、「とはぬまをうらむらさきにさくふぢのなにとてまつにかかりそめけむ」という俊子内親王大進

の歌がある。「松にかゝれる」「まつにかかりそめけむ」、「藤なみ」「ふぢ」、「うら紫」「うらむらさき」と、用語の一致を見る。「金葉集」歌ほど直接的な引用ではないが、この歌を踏まえた表現とみなしてよいのではないかと思う。

「うら紫」というのはかなり珍しい歌語で、勅撰集にはこの『詞花集』歌の一例のみである。「新編国歌大観」の全所収歌からは三〇例検索されるが、藤の花を詠んだ歌に関しては、すべて『詞花集』歌を念頭においた作と考えられる。室町から江戸期のものが多いが、早い例としては、「行く春をうらむらさきの藤の花帰るたよりにそめやはつらん」(『拾遺愚草』五一八)、「はるのいろもけふをかぎりのゆふづくひさしもやふぢのうらむらさきに」(『千五百番歌合』九五)、「咲きかかるうらむらさきの藤浪をみどりにかへすまつのうら風」(『夫木抄』二一七八)などがあり、いずれも『詞花集』歌を本歌にした詠とみなしてよさそうである。

『詞花集』歌は、『千五百番歌合』千三百四十二番の判詞にも引かれており、歌人たちにはよく知られた歌であった。『平家物語』のこの場面の描写にその表現が踏まえられた可能性は高い。古語辞典においても両用例が並べて掲げられることが多いにもかかわらず、諸注が全く指摘しないのは、『詞花集』歌が恋部に載る歌だからであるろうか。しかしながら、本歌取りの技法が季や主題を変えざるを原則としたように、恋歌の表現を初夏の情景描写に取り入れることも不自然ではないと思うのである。大方のご意見を乞いたい。